

干し草の山の中の針 イーシャ・サーデサイによる再話

昔々、インド東部に、偉大な精神の師が住んでいました。分かりやすい比喻と、的確なたとえを通して教えを伝授することで知られた詩聖でした。この師には2人の弟子がいました。チャタジー教授とマートウル氏です。

チャタジー教授は著名な学者であり、手の指の数ほど学位を持っていました。彼は背が高く細身で、角縁の眼鏡をかけ、髪は銀色の縞模様になっており、そのため全体的に際立って見えました。チャタジー教授は——彼の話を書く人すべてに言っていたように——知識を重んじていました。特に本から得た知識を。彼は理論を重視しました。抽象的概念。この宇宙のあらゆるものの性質を決定する、目に見えない法則の探究、など。

マートウル氏は商人で、しかも非常に成功していました。彼は背が低くて胸板が広く、印象的な大きなカイゼルひげを生やしていました。毎日、同じようなクルタというシンプルな絹の服を着ていました。やるべきことが山ほどあったので、服を選ぶのに時間を費やす気にはなれなかったのです。マートウル氏は——自分と関わる誰にでもそう言っていました——実用的でした。彼は効率と結果、(できれば小さな)投資に対する(大きな)見返りを好みました。

チャタジー教授とマートウル氏は友人であり、ライバルでもありました。彼らは師に対する共通の献身を通じて、互いに引かれ合うと同時に、相手の人生に対する取り組み方には困惑していました。チャタジー教授は、マートウル氏が結果と利益にこだわり過ぎていると考えました。彼は、この商人が人生の荘厳さ——神秘的な物事と物事の間、いつまでも残る未知、一瞬一瞬に織り込まれてこの人生を連続する発見の人生としている大小さまざまな疑問——を見逃していると確信していました。

マートウル氏は、チャタジー教授は非現実的なことを考えていると思いました。

彼らの違いは、精神修行に対する見方にも反映されていました。学者は、知るべきことはすべて教典に書かれていると信じて、本を熟読しました。世に知られていない文献を夢中になって読み、熱心に書き留めたせいで指をインクのしみだらけにしなが、毎晩のように、彼は書斎で眠りに落ちました。

その商人は勉強をあまり重視していませんでした。彼は、目標は行動によってのみ達成されると考えていました。毎朝スーリヤ・ナマスカルを 50 回繰り返し、その後に瞑想をしていましたが、何について瞑想すればよいか、いつも分かっていませんでした。彼は朝のマントラを駆け足で5分きっかりで唱え、夕方の賛歌も同じようにしました。自分が歌っている言葉の深い意味についてはあまり知りませんでしたが、それでも構いませんでした。彼は1日に少なくとも4回修行を完了すれば、上首尾だと考えていました。

2人は会うたびにすさまじい論争をしました。

「読書の進み具合はどうですか？」と、マートウル氏は学者に尋ねました。「もう 1000 冊くらいになっているはずです。教えてください、あなたは悟りに近づいていますか？」

チャタジー教授はあざ笑って言いました。「少なくとも私はあなたよりは近い。神は一番早く自分の名前を朗唱できる人にメダルを配っているとでも思っているのですか？」

ある日、師は2人の弟子を家に呼びました。彼らは互いを見るとすぐに口を開き、いつもの論争を繰り返すところでした。しかしその時、師の声がしました。

「こちらへ来なさい」と、師は呼び掛けました。「ゴーシャーラーの裏手へ」

彼らは急いで家の周りを回ってゴーシャーラー、牛が飼われている場所へ行きました。すると、大きな丸い干し草の山が見えてきました。その上に彼らの師が座っていました。彼はゆったりとした白い衣を着て、手に何かを持っていました。

弟子は身をかがめてプラナムをささげました。彼らが立ち上がると、マートウル氏が話しました。

「先生、お会いできて本当に嬉しいです。しかし、この干し草がなぜここにあるのか、そしてなぜあなたがその上に座っているのか、教えてください」

師はほほ笑みました。

「この干し草は私の牛たちのためのものだ」と、彼は言いました。彼は近くで草を食べている数頭の牛を身ぶりで示しました。「そして、私はあなたたちの論争にきっぱりと決着をつけるのを手伝うためにここにいるのだ」

2人の男は混乱しているように見えました。師は続けました。

「この針が見えるかい？」彼はその物体を手に掲げて尋ねました。「鉄でできていて、一番細い干し草よりも小さくて細い」

師は針を干し草の山の中に落としました。

「さあ、教えてくれ」と、彼は言いました。「2人はそれぞれ、この干し草の山に埋もれてしまった針をどうやって見つけるのだろうか？」

マートウル氏とチャタジー教授はちらりと視線を交わし、すぐに話し始めました。

「一度に1人ずつ」と、師は辛抱強く言いました。「チャタジー教授、まず、あなたから」

教授は少し背筋を伸ばして立ち上がり、眼鏡を整えました。

「そうですね」と、彼は言いました。「私なら干し草を一片ずつ手に取り、まるでそれが哲学的な原理でもあるかのように綿密に調べます。それを光にかざし、その形を調べ、重さを評価し、それが実際には針ではないと判断した後にのみ廃棄します。このように、針にたどり着くまで、干し草を一つ残らず調べていきます」

師は無表情でした。

「それで、マートウルさん、あなたは？」と、彼は尋ねました。「この仕事をどのように進めるかな？」

マートウル氏はチャタジー教授を、すっかり正気を失ってしまったのではないかというように見詰めていましたが、師の方に向き直りました。

「それは簡単です」と、彼は言いました。「この干し草の山にマッチを持って行きます。干し草は燃えます。鉄の針は少し焦げるかもしれませんが、そのまま残るはずです。私ならこの仕事は数分で終わらせます」

彼は自己満足しているようにほほ笑みました。一方、チャタジー教授は憤慨したように見えました。

師は再び口を開きました。「なるほど」。彼はそっと尋ねました。「私の理解では、あなたたちのうちの1人は、何日も続けてここに座って干し草を選別して満足しているだろう。チャタジー教授、私の牛たちはどうなるかな？ 牛たちはその間中ずっと餌を待たされるんじゃないかな？」

教授は唾を飲み込みました。どうやら彼はそんなことは考えていなかったようでした。

師は続けました。「そして、マートウルさん、あなたは干し草の山をすっかり破壊し、それによって私の牛たちから餌を奪ってしまうだろう」

マートウル氏は、理解し始めて、「ああ」と小さな声を漏らしました。

「しかし、別の方法がある」と、師は言いました。彼は干し草の山から降りました。

「これを見なさい」と、師は言いました。彼は衣服のポケットに手を伸ばし、大きな磁石を取り出しました。彼は磁石を高く掲げながら、干し草の山の周りをゆっくりと歩き回りました。しばらくすると、まるで何かが中から逃げ出そうとしているかのように干し草の一部が引っ張られ始めました。さらにしばらくすると——シュッ。鉄の針が飛び出し、磁石にくっつきました。

チャタジー教授もマートウル氏も驚嘆の声を上げました。師は温かい目で彼らを見詰めました。

「磁石は針に一点集中している」と、彼は説明しました。「それは針と一体化したいという自らの願望だけを知っている。同じように、あなたの愛、あなたの切望、あなたの集中した献身に満ちた努力が、神の愛を引き付けるのだ」

これは、グルマーイ・チッドヴィラーサーナンダがシッダ・ヨーガのサツツァングとシャクティパート・インテンシヴで語った物語の翻案です。それはインドの口承文学の伝統に起源があります。